まさご

発行　松山工業高等学校ＰＴＡ

成長の根底にあるもの

校長　宮地　洋安

保護者の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動に、御理解・御協力を賜り、誠にありがとうございます。

今年度のＰＴＡ活動は、５月に新型コロナウイルスが５類へ移行したこともあり、一つの行事が通常の形式で実施されました。同じく生徒の活動につきましても、昨年度実施できなかった３年生の修学旅行も含め、リレーカーニバルや修学旅行、運動会、松工祭など、これまで実施することが難しかった各種行事を順調に行うことができました。

生徒のみなさんが、笑顔で生き生きと行事に取り組んでいる様子を見ながら、以前は実施できて当たり前と思っていた行事ですが、実施できることがありがたいと行事ごとに感謝の気持ちを抱くようになったのは、コロナ禍を通して学んだことの一つではないかと思っています。

そして、スポーツや文化、ものづくりに関する各種大会も通常通り実施され、多岐にわたって生徒のみなさんが大いに活躍してくれています。ソフトボールでの国体優勝をはじめ、多くの部活動が全国大会へと出場し、躍動しています。文化部においても複数の部活動が全国大会への出場を果たしています。また、ものづくり分野では、三つの分野で全国大会へと出場し、「電子回路組立部門」で全国準優勝に輝いています。その他にも生徒のみなさんの活躍は枚挙に暇がなく、多くの素晴らしい成果を上げています。

ところで、今年度も大リーグで素晴らしい活躍を見せて二度目のＭＶＰに輝いた大谷翔平選手の恩師は、選手の才能を見るときのポイントについて、「身体能力は重要です。骨格は遺伝するので、親も観察します。さらに重視するのは、親が子どもにどんな言葉をかけているか、他の親とどんなふうに接しているか。親の育て方や考え方で子どものマインドは変わり、伸びしろに差が出ると感じています。」と述べています。

今年度、生徒のみなさんがスポーツ、文化、ものづくりなどの様々な分野で活躍し、次々と大きな成果を上げている様子を見るにつけ、生徒の成長や伸びしろの大きさを感じ、試合で遺憾なく力を発揮する姿に感心することしきりです。これらは、日々の生徒の弛まぬ努力とともに、保護者の皆様の温かい御支援・御協力、そして、日々の大きな支えがあってこそと、改めて感じております。

今後も学校での教育活動を通じて、次代を担う有為な若者を育成すべく尽力してまいりますので、保護者の皆様におかれましては、引き続きお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

松工祭に参加して
「４年ぶりの通常開催」

副会長　村上　征士郎

コロナ禍が終息し、４年ぶりの通常開催となった松工祭、各種バザーを担当するＰＴＡ役員も４年前とは多くのメンバーが入れ替わっていることから、バザーの準備段階から手探り状態でのスタートでした。うどんは何食？　おにぎりは幾つ？　値段は幾ら？　などなど……。

まずはバザーで出品するリサイクル品集めから始まり、九月に行われた運動会で多くの保護者の皆さんに物品をお持ち寄りいただいたおかげで十分な品数を確保することができました。ご協力ありがとうございました。

恒例の農産品販売では保護者の方や地域の皆さんから米や野菜などの提供をいただきました。そのほか四国カルスト大野ヶ原で前日の朝採れた大野ヶ原大根などを、スーパーの値段よりも格安で販売し、販売開始前からテント前は大勢のお客さんで大賑わい。開始２時間後にはほとんどの商品が完売しました。

また、バザーコーナー隣の飲食ブースも老若男女多くの人で溢れ、うどん、おにぎり

などの当日券がすべて売り切れてしまう大盛況ぶりでした。

来年は今年以上の盛り上がりになるよう、より工夫を凝らし、アップデートしたいと思います。理事の皆さん、また来年度もよろしくお願いします！

「工業高校の魅力があふれた文化祭」

文化部長　宮岡　佐千子

久しぶりの通常開催となった松工祭は、参加された皆さんの笑顔があふれる文化祭となりました。ご協力いただきました役員理事の皆さんをはじめ、多くの関係者の方々に感謝申し上げます。

祝日開催ということもあり、地域の皆さんや卒業生、他の学校の保護者の方が大勢来てくださり、学校じゅうに賑わいを感じました。各教室や敷地内で行われた学科等の催しは、工業高校ならではの見どころがあり、見て・触って・やってみることができる体験型の文化祭という点が普通科校にはない特色だと思います。

先日、他校の保護者の方に、「松工祭、観に行ったけど、すごく良かった。生徒やＰＴＡの飲食ブース・バザーももちろんだけど、色んな学科がそれぞれの特色をアピールして、生徒みんながとても楽しそうに取り組んでますね」と言われ、保護者としても大変嬉しく思いました。これからも松工祭が地域の皆さんに愛され、生徒たちが自分たちで主体的に考え取り組めるイベントの場として益々盛り上がりを見せてくれることを期待しています。

なお、バザーの収益は、リサイクル品・農産品・飲食バザー(運動会のジュース販売含)合わせて 129,199 円でした。収益のうち 24,453 円を十二月九日に実施しましたＰＴＡソフトバレーボール大会の運営費(飲料・景品・傷害保険)として使わせていただきました。また役員で相談し、100,000 円を生徒たちのために使っていただくこととしました。運動用具(卓球ラケット、卓球ボール、バドミントンシャトル、テニスボール)の購入費とし、クラスマッチや授業で使っていただくようにしました。残金 4,746 円はＰＴＡ会計に入金しました。皆様ありがとうございました。

ソフトバレーボール大会

保健体育部長　松島　智子

大雨の影響で七月から延期しておりましたソフトバレーボール大会を、十二月九日(土)十三時～松工第１体育館で実施しました。会員、ＯＢ会員、先生方の合計三十七名が集まり、６チームで熱戦が繰り広げられ、活気ある大会となりました。

優勝　バレー部保護者チーム

３チームずつの一次リーグを経て順位決定トーナメントを行いました。決勝にはバレー部保護者チームと保健体育部長チームが進出し、試合時間終了のぎりぎりまで点差のつかない接戦となりました。終了ブザーの瞬間にバレー部に１点が入り、劇的に優勝が決まりました。

お忙しい中、参加してくださった皆様、ありがとうございました。

準優勝　保健体育部長チーム

各科だより　～情報電子科～

情報電子科長　青野　潤三

情報電子科は、平成21年度に電子科と情報技術科との統廃合により新設された学科で、本校では最も歴史の浅い学科です。今年で15年目を迎えました。本校で唯一の電子類型と情報類型のコース制のある学科であり、情報通信技術者を育てることを目標にしています。

電子類型は、電子回路や通信などの知識や技術を修得することができます。情報類型ではコンピュータのハードウェアやソフトウェアなどの知識や技術を修得することができます。

進路状況は、就職約四割、進学約六割の進学の多い学科です。就職は半分以上が県外のフィールドエンジニア・システムエンジニアなどとして情報系の大企業や、県内においても毎日CMが流れている企業にも就業しています。進学は毎年レベルが高く、国公立大学に五名以上が進学しています。

資格取得では、国家試験の工事担任者、ITパスポート、基本情報技術者など多くの試験にチャレンジし、全国工業高等学校長協会のジュニアマイスター顕彰で、ゴールドやシルバーの認定を受ける生徒が非常に多くなっています。いろいろな資格を取得することは専門分野の実力の証につながり、進路実現に有効な手段となっています。

情報電子科の生徒は、各部活動においても活躍しています。電気技術部に所属している生徒は、マイコンカーラリー全国大会出場や、メカトロ部に所属している生徒は、技能五輪全国大会出場しています。プログラミングコンテスト、ものづくり競技大会の電子組立部門では毎年全国大会で上位の成績を収めています。

学校行事の運動会では、一致団結して上位を目指していますが、行進や応援では毎年奇抜なアイデアでいつも注目を浴びています。今年はアラジンをテーマにパネルを製作しながら、ジーニーの御輿を製作しました。当日、御輿が大きすぎてグランドに入れるのに一苦労しましたが、応援では盛り上がることができました。総合成績はいつも通りでしたが、情報電子科の生徒たちは楽しい思い出になったと思います。

今後もさらに魅力のある学科にするために、また、現在も社会の第一線で活躍している先輩方の後に続けるよう生徒・職員が一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

第65回中国・四国地区高等学校PTA連合大会、第72回全国高等学校PTA連合大会2023宮城大会参加報告

PTA会長　佐々木　亨

令和5年7月14日に岡山県倉敷市の倉敷市民会館にて、「集まれば　こころはばれ　晴れの国　～『集まる』『話す』の大切さ再発見～」というテーマのもと、第65回中国・四国地区高等学校PTA連合大会岡山大会が開催されました。

前日より、県内各地の参加者と一緒に貸切バスで岡山へ向かいましたが、私は本年PTA会長になったばかりで面識のある参加者も少なく、不安に感じる面もありました。バスの中では、自己紹介からはじまり各学校での取り組み等の意見交換をしているうちに、いつの間にか「気の合う仲間同士」のようになっていました。

大会では、作家・写真家であり一級建築士でもある、稲葉なおと氏が「倉敷から始まる家族旅」という演題で講演をしてくださいました。講演を聞き終えて、様々な角度から物事を見つめることが大切だと感じました。倉敷古城池高校、倉敷商業高校、倉敷翠松高校の3校の学校の生徒による「課題解決型学習（BPL）」の取り組みについての発表がありました。大勢の前でも堂々と発表する姿に圧倒されるとともに、地域の課題を題材にして自主的に問題解決に取り組んでいく姿や、高校生ならではの視点と柔軟な発想に感心しました。

また、研究協議では「コロナ禍の運

動会の保護者配信」「高校合併に伴うＰＴＡ活動の統合」「キャリア教育を支えるＰＴＡ活動の事例」についての発表が行われ、活発な質疑応答が交わされ有意義な大会でした。そして最後に次年度開催の高知県高Ｐ連にバトンタッチをして閉会となりました。

８月24、25日には第72回全国高等学校ＰＴＡ大会２０２３宮城大会が「豊かな杜につむぐ虹の光」というテーマで開催され、オンラインで視聴させていただきました。24日は、宮城教育大学の市瀬智紀教授の講演やパネルディスカッション等が行われました。翌25日には仙台育英学園高等学校野球部監督の須江航氏による「伝わる言葉・失敗から学ぶ　～しなやかな強さで生き抜く力～」というテーマでの講演があり、ご自身の体験を通して、コミュニケーションの大切さや選手と向き合うことの大切さを語ってくださいました。

両大会を通じて、改めて「人と人とのつながり」の大切さを認識することができました。今後のＰＴＡ活動におきまして、役員の皆様、学校職員の皆様、そしてＰＴＡ会員の皆様としっかりとコミュニケーションを取りながら役割を果たして参りたいと思います。

ＰＴＡ研修旅行報告

牧野植物園を見学して

令和五年七月二十九日(土)、久しぶりのＰＴＡ研修旅行を実施することができました。ＰＴＡ会長をはじめとする会員の皆様二十三名と、校長以下四名の教員、合わせて二十九名の参加を得て高知県への日帰り研修旅行となりました。

バスの中からお話もはずみ、和気藹々として牧野植物園に到着しました。ＮＨＫの連続テレビ小説の放送により、ちょうど話題となっている時で、日本各地のナンバーの車に混じってバスを止め、早速入園しました。ずいぶん昔に訪れた経験のある方もおられ、きれいに改装された植物園に感嘆の声が聞かれました。八月も間近の暑い中で、屋内の展示は涼しいものの、広い園内を歩くのはなかなか大変で、あてられた二時間ほどの時間では回りきれないほどでした。

園内には数え切れない種類の植物が植えられ、道々の植物を観察したり、館内に展示された牧野富太郎の人生に触れたりしました。特に、当時の新聞紙に挟まれた標本が積み上がる様と、おそらくとんでもない集中力で描かれたと思われる植物のスケッチを見ながら、並々ならぬ植物学への熱意に触れました。

昼時は、かつおのわら焼きを各自体験しました。長めの棒串に刺して準備されたかつおの柵を燃え上がるわらの炎であぶりました。周りがほんのり温かく香ばしい焼きたてかつおのたたきは、日頃なかなか味わえないおいしさで、あちこちからにぎやかな声があがり、みなさんとの交流が一層深まりました。高知県立美術館、ひろめ市場にも立ち寄ることができ、短い時間でしたが高知の文化・芸術に触れながら参加者の皆さんとの親睦を深めることのできる楽しく有意義な研修旅行となりました。（庶務係）

遠雷

幸せとＰＴＡ

ＰＴＡ顧問　正鋳　真一

「幸せな人生を定義せよ」

こんな問題が出題されたとしたら皆さんはどんな回答を作成しますか？

「家族」「仕事」「財産」「健康」「趣味」。人それぞれたくさんの答えが考えられますよね。ハーバード大学は1938年から始まった80年以上に及ぶ長期間の研究の末その答えを「幸せな人生とは良い人間関係に包まれていることである」と結論づけています。実体験においても、家庭で職場で地域や趣味・ボランティアの場で良い人間関係に恵まれることはとても幸せなことだと容易に想像できると思います。

「ＰＴＡ」と聞くと色々なイメージが浮かぶのではないでしょうか。皆さんが経験した、あるいは見聞きした中で百人いれば百通りの解釈があると思います。しかし、全てに共通しているのは「ボランティアの場であり、人の集まりである」ということです。金銭の動きはありますが営利目的で活動しているのではありませんし、ＡＩや機械が運用している訳でもありません。今振り返ると、義務教育から高校に至るまでたくさんの仲間と出会ってきました。各単位ＰＴＡから市・県の連合会を含めてともに汗を流した皆さんとは本当にいい人間関係を築いてきました。純粋な気持ちで学校や子供たちのために無償で活動する仲間のことを心から尊敬しています。ＰＴＡは敬意を示すことができる人と出会える場と言え、幸せな人生を送る一つの要素とも思っています。

また同じくハーバード大学の研究では「幸せになるためのテクニック」も紹介されていました。その一つが「その場に集中する」というものです。我々は車を運転している時も晩ごはんのメニューを考えたり、人と話していてもスマホのことが気になったり、テレビを見ていても仕事の事が心配になったりしてしまいます。果たしてそれは人生にとってプラスになるのでしょうか？「その場に集中する」というのは特に「家族との良好な関係を築くために」という観点で述べられていました。要約すれば「家族と話す時は話すことに集中し、家族といる時は家族のことを考える」ということになりますが、これは家族との関係だけではなく、我々の日常生活で多くのことに有用ではないでしょうか。例えば私は自転車で通勤していますが、考え事をしていれば何も得られるものはありませんが、その瞬間瞬間に目に入るもの「土手の菜の花が綺麗に咲いているな」「金木犀がようやく香りだしたな」「小学生が元気に登校しているな」と認識すると、何か元気を与えられた感じがします。

最後に幸せに関するエピソードを紹介します。大正・昭和に小説家、随筆家として活躍された宇野千代さんのインタビュー記事です。１９８７年の雑誌に掲載されたもので、時間は経っているのですが古さは感じられませんので是非ご一読ください。

―以下１９８７年８月号『致知』より

私は六十歳の時にね、ニューヨークでものすごく感動したんです。ニューヨークの大通りを観光バスに乗って見物していたら、私のすぐ近くに腰をおろしていた一人の若い女がきれいに化粧してね、花飾りのいっぱいついた帽子をかぶって、満面に笑みをたたえ、見るからに幸福でたまらないという顔をしている。よく見ると、両手とも肩からすっぽり切り落とされたようになっているんです。

それなのに嬉しそうな、世にも幸福そうな顔をして、

「私は両手とも肩からすっぽりと落ちています。でも、こんなによいお天気で気持ちがよいのに、両手がないくらいのことで、この私が、幸福になってはいけない、とでもいうことがあるでしょうか。人間は誰にでも幸福になる権利があるんではないでしょうか」とでも言ってるようにほほえんでいる。

あれだと、思いましたね。私は、この時の感動をいまも忘れないですね。